

対人援助学 & 心理学の縦横無尽

(3 2)

サトウタツヤ

(立命館大学総合心理学部)

1 はじめに

TEA (複線径路等至性アプローチ) は 2004 年にその原型が発表され、2005 年には最初の研究論文 (安田、2005)、2006 年に理論的論文 (サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー、2006) が発表されたことで発展してきた質的研究法の 1 つである。発表から 15 年以上を経て、日本国内では心理学のみならず発達・保育・言語・看護・キャリア・教育・スポーツその他もろもろの領域で広く使われる研究法となった。

TEA 研究会と称する研究会でも各種の講習会や研究会を行っているものの、TEA についても学ぶ場は少ない。そこで、TEA に関心をもった方々は関連する本や論文を読み、独学に近い形で研究を進めていてくれる。

最近、本学のある大学院の院生さんが TEA を用いて修士論文を書いていることを知った。そしてその方の指導教員が指導のために熱心に TEA について勉強しながら院生を指導してくれているということを知った。この指導教員とはとある会議でいつも隣に座っている方である。そこで聊か勝手ながら院生さんの話を伺ってアドバイスをすることにした。

そしてこの院生さんの研究を聞いてあれこれ考えてアドバイスしている中で、TEA における 1 / 4 / 9 の法則について得るところがあったので、ここに書き記しておくことにした。多くの方はご存じと思うが、私はモノゴトをまじめに考えて何かを発表するというよりは、何かをしながら喋ることで考えがまとまっていくタイプである。今回もそうした機会となったので、そこで得たインスピレーションを文章にしておきたいのである。

2 1 / 4 / 9 の法則とは

1 / 4 / 9 の法則とは、TEA (複線径路等至性アプローチ) の研究において、概ね 1, 4, 9, 16・・・つまり 1^2 , 2^2 , 3^2 , 4^2 ・・・ごとに、研究成果の意義が異なるものになるということである (安田・サトウ、2012)。つまり、ここで重要なことは量的研究のように人数が増えればその分リッチな成果が得られるというような単純な関係ではないということである。

質的研究では一人に話を聞くより二人に聞いたら二倍良くなるということはない。中途半端な比較になるだけである。同様に、5 人より 6 人の方がいいということもない。百人に聞いたら百倍良くなることもない。そして、ある種の人数のまとまりで、研究成果の意

義も異なってくることも分かってきた。こうした関係は一経験的に分かってきたことであり一対象者数の1/4/9の法則と言われている（表1）

表1 TEA 研究における1/4/9の法則

対象者数	分かること/できること
$\cdot 1^2 \pm 0 \rightarrow 1$	個人の径路の深みが分かる
$\cdot 2^2 \pm 1 \rightarrow 3 \sim 5$	径路における共通性と多様性を可視化できる
$\cdot 3^2 \pm 2 \rightarrow 7 \sim 11$	径路の類型化ができる
$\cdot 4^2 \pm 3 \rightarrow 13 \sim 19$	時期推移の骨格が見える
$\cdot 5^2 \pm 4 \rightarrow 21 \sim 29$	社会構造の骨格が見える

このように、対象者数が1、4、9、16、25である場合について、それぞれに長所があるし短所もあることを示したのがTEA研究における1/4/9の法則（何事も、利点は欠点、欠点は利点である）である。あえて問題点を言うなら、TEAに限らず質的研究において25名くらいを対象にすると細かなところが見えにくくなり、質的研究の良さが失われるというか、労力をかけただけの豊かな成果を得ることができない、ということであろうか。

3 ある実例から得たインスピレーション

前述のように筆者が勤める大学の他の大学院でTEA（複線径路等至性アプローチ）を用いて修士論文を書く院生さんがいることを知った。ありがたいことである。その研究について話を聞く機会があった。実際の例とは少しずらして、コミュニティにおける居場所づくりに取り組んでいる人たちの研究をしているということにしておこう。そして、一定の条件を満たせば国による補助金が出るということにしておく。対象者数は6名である。これは表1に照らしてみると、 $4 + 1 = 5$ だし、 $9 - 2 = 7$ だから、あてはまるどころがない。この場合、切り上げよりは切り下げとなる。つまり6人を対象とする研究は9人の研究に近いというよりは4人の研究に近いことになる。つまり、径路の類型を描くことはできないが径路における何らかの多様性を描くことが可能になるはずである。

この架空例の場合、EFP（等至点）は、「コミュニティにおける居場所づくり」の完成であるから、そうした経験のある人をご招待してお話を伺うことになる（HSI＝歴史的構造化ご招待）。そして「コミュニティにおける居場所づくり」というEFP（等至点）には、当然ながら「コミュニティにおける居場所づくりをしない」というP-EFP（両極化した等至点）があり、それが時間と異なる次元を構成することになる。こうすることで、TEM（複線径路等至性モデリング）の骨格が定まる。

まずやるべきことは、個々人の対象者からお話を聞くことである。可能な限り、時系列を意識してもらうことが重要である。ただし、時系列に聞いたことをそのまま並べるのは

TEM（複線径路等至性モデリング）ではなく年表であるから、二次元を意識してそれぞれの出来事の変動がわかるように可視化させる必要がある。そして、BFP と OPP を定めることが必要である。この BFP と OPP は、時期区分をするためにも重要である。逆から言えば BFP と OPP で区切った時に良い時期区分ができるのであれば、その BFP と OPP は良いということになる。この架空例では BFP は「居場所づくりをしよう」と思ったこと、OPP は「国の補助金システムについて知る」ということになる。

今、説明を簡単にするために「コミュニティにおける居場所づくり」という EFP（等至点）に至るまでに、一つの BFP（分岐点）があり、一つの OPP（必須通過点）があるとしてみたい。そうであるならば以下の図のようなものが、Minimal（必要最小限）な TEM（複線径路等至性モデリング）ということになる。

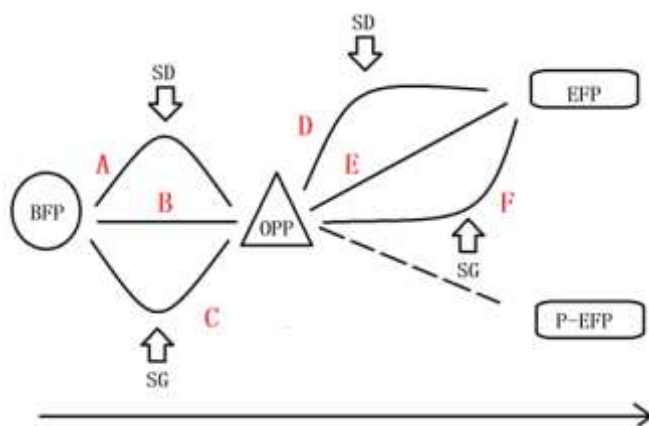


図1 TEMにおけるBFP,OPP,EFPの最小限の径路モデル

この図1において、BFPからOPPへの径路を考えるなら、(A)何もなくす一つと行く径路、(B)一度盛り上がりそのままEFPに行けそうだったけどSD(社会的方向づけ)によって下降した径路、(C)一度は遠ざかったけどSG(社会的助勢)によって上昇してOPPにたどりついた径路、という3種類が考えられる。そして、OPPからEFPへの径路も同様に3種の径路があるだろうと想定できる(D~F)。この架空例に則していえば、居場所づくりをしようと思った(BFP)人が何かの理由でそれが難しくなったのだが、SGを得て国の補助金を知り(OPP)、その後は地域の居場所づくりがスムーズにうまくいった(EFP)ということがあったかもしれない(図1上ではC→Eとなる)。むしろ架空例だからこういう単純化ができるのであり、実際にはより多くの出来事(様々なイベント)を経験しているはずだから、これほど単純ではなく上下変動も激しいだろう。

さて3つの点(BFP、OPP、EFP)の2点間においてそれぞれを結ぶ径路が3つずつあるとするならば、この最小限のTEMにおいてさえも3(A,B,C)×3(D,E,F)で9の径路が可能となる。4±1=3~5人の方をご招待して研究を行う場合には、全員が異なる径路であったとしても9通りにはならない。可能な径路のうちの限られた径路しか辿らないの

は当然である。そうであるからこそ、 4 ± 1 の方の経験のどこが共通していてどこに差異があるのかを描いていくことが重要になるのである。共通性と多様性の発見が面白いのである。

さらにBFPが3つ、OPPが2つ、EFPが1つというような例であれば径路の可能性は $3 \times 3 \times 2 \times 3$ で54通りとなる。そのような場合でも、 4 ± 1 のケースを扱う研究では、どこで多様性が表れるのかを注意深く見ることが重要だし面白いということになる。

いずれにせよ、6人の径路を注意深く聞いて、BFPとOPPの間の径路のあり方について、大まかに言えばどのような径路(A~Cのいずれか)、OPPとEFPの間はどうだったのか(D~Fのいずれか)を意識することで、共通性と多様性を感知することができるかと期待できる。たとえば、BFPとOPPの間は全員が同じようであったが、OPPとEFPの間は人によって異なった、というようなことが分かるかもしれない。

以上は、3つの点(BFP、OPP、EFP)で考えた最小のTEMの話であるから、実際にはもう少し入り組んでいるだろうが、共通性と多様性を理解できるのが 4 ± 1 の事例数の良いところである。

蛇足ながら、 9 ± 2 の事例数であっても、径路の組み合わせ総数からすれば決して十分な数ではない。図1の最小限のTEMでさえ $3(A, B, C) \times 3(D, E, F)$ で9の径路があったことを思い起こそう。しかし、面白いことに、 9 ± 2 の事例数を扱うならば、径路自体が3つ程度に収まってしまふことが経験的に分かっている。BFPが3つ、OPPが2つ、EFPが1つというような例(径路の可能性は $3 \times 3 \times 2 \times 3$ で54通り)であっても、3、4個の径路に収まるということが起きるのである。おそらく、それこそが文化の力なのである。よく言えば親心のようなものであるし、悪くいえば社会からの抑圧によって、人は選択肢があったとしてもサイコロを振って選ぶように自由には選べないということなのである。心理学には水路づけ(Canalization)という概念があるが、まさに文化は秩序だった水路を示すものなのかもしれない。だからこそ現実に歩むことができる径路の数は、選択肢の単純な確率計算にはならないのである。エントロピーを拡大させないのが文化だ、と言えるかもしれない。径路の類型を通して文化の力を見ることができなのがTEMにおける 9 ± 2 の事例を扱う強みである。

4 ヒストリーかストーリーか

最後にライフヒストリーかライフストーリーか、という問題について簡単に考えてみたい。初めて買ったレコード(楽曲)は何か、ということを取りあげてみる。私自身のことで恐縮だが、小学生のときに伯父(父の兄)からもらったお小遣いで買ったレコード(楽曲)が「自分で買った最初のレコード」だと思っている。具体的には大田裕美「木綿のハンカチーフ」である。伯父の思い出と大田裕美さんの魅力と自分からは遠い大人びた恋愛模様の描写、すべてがセットになって自分の歴史を作っている。

と、思っていたのだが、実際に調べてみるとこの楽曲は1975年にリリースされており、

1962 年生まれの私は確実に中学生になっていたのであった。とはいえそのことが分かってからも自分の中では、この出来事は小学生時代の最後の冬の出来事として位置づけられている（それにはそれなりの理由があるはずだ）。

ライフストーリーとライフヒストリーの比較ということで考えてみると、ヒストリーを重視する立場にたてば、(年月日も含めて) 実際にあったことを重視すべきだし、ストーリーを重視する立場にたてば、語り手の物語を重視すべきだということになる。どちらの立場もありえる。とはいえ TEA (複線径路等至性アプローチ) においては、まず対象者の考える時系列を重視すべきである。うっかりすると、聞き手である自分の論理構成で時間を再構成してしまう可能性があるからである。対象者が自分で物語化することは許容されるとしても、聞き手が自分の論理で時系列を歪めることは避けるべきである。

ライフストーリーであってもライフヒストリーであっても、対象者がどのように捉えているのかを丁寧に確認しつつ TEM 図を作っていく必要がある。トランスビューを実践するためには最低 3 回はお会いしましょうね！

文献

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヴァルシナー=ヤーン 2006 複線径路・等至性モデル 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 質的心理学研究、5、255-275。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/5/1/5_255/_article/-char/ja/

安田裕子 2005, 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程 質的心理学研究, 4, 201-226.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/4/1/4_201/_article/-char/ja/

安田裕子・サトウタツヤ 2012 TEM でわかる人生の径路 新曜社

謝辞

この小文を書くきっかけを与えてくれた立命館大学スポーツ健康科学研究科・博士課程前期課程の嶋晴菜(しま・せいな)さんと立命館大学スポーツ健康科学部長積仁(ながづみ・じん)教授に感謝します。

蛇足

良い大学というのは指導教員以外から刺激を受けられることだと思っている。指導教員が面倒をみるのは当たり前。それ以外の研究者から指導を受けられるのが良い大学である。今回も(余計なお節介ではなく)そうした例になることを願う。私の弟子たちも学内の多くの方に育てられたきた。感謝しかない。